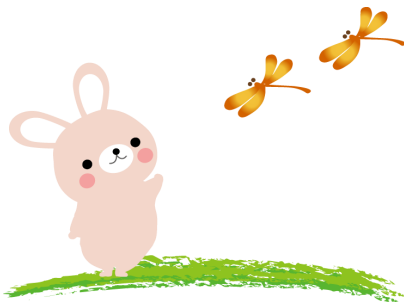




TAKING OFF

大阪学院大学/大阪学院大学短期大学部
国際センター ニュースレター

Vol. 28 Fall, 2016



1. Hello from All Corners of the World!

今回紹介するのは、サッカー選手でありながら、語学力の研鑽に努め、後輩たちからの信頼も厚かった卒業生の青木崇洋さんです。在学時代はアメリカ・ニューヨーク州にあるダウリング大学に交換留学し、卒業後はサッカー指導を経て、今は栃木県にある自動車部品会社で仕事をしています。将来はその業界での海外進出を目標に頑張っています。

た か ひ ろ

青木 崇洋 (2011年外国語学部卒業)

私は、現在自動車部品の開発設計をしています。この業界に入ってからまだ日が浅いので、先輩の助けを借りながら、PC上で部品を製作しています。

OGU在学中、私は外国語を専攻していました。先生一人一人がそれぞれの科目を熱心に教えてくださったことを今でも鮮明に覚えています。私の学生生活と言えば、自分の学部の授業に加えて、ホスピタリティイナダストリー研究所が開講する授業や認定心理士になるための授業を受け、授業の合間にはI-Chat Loungeで気の置けない友達やスタッフとゆったりとした時間を過ごしました。中でもイギリスのケンブリッジ大学と回線を結んで開講されていた経済学の授業は楽しみの一つでした。

学外では、服屋でアルバイト、友達と自転車で琵琶湖を一周、近くのピックエコーでカラオケ、淡路島まで友達とドライブ、家の近くでバーベキュー、高槻のジャズフェスに参加、ボルダリングや波乗りなど、様々なことをしました。自分の好きな事、興味のある事とことんやった、そんな学生生活でした。逆に言うと自分の将来が明確にイメージできず、ひたすら先を考えずに何にでも手を出していたとも言えるかもしれません。

その延長線上で私は航空業界に興味を持ちました。『航空＝英語』でしようという事で、留学をしました。まずは英語を使えるようになったかったので、留学先はアメリカを選びました。アメリカの大学では、留学生向けのESL(英語を第二言語として学ぶ)クラスを中心に受講し、他にも心理学や社会学、人事関係概論を学びました。受入れ先の大学では、クラスの開始時刻が科目によってまちまちで、私の受講したクラスは朝型でした。お陰で週



留学先のダウリング大学の先生と(本人左)

2回は朝9時半に全ての授業が終わったので、芝の運動場でランニングしたり、図書館に行ったり、日本にいた時より余裕のある生活をする事ができました。また週末には、友達と街に遊びに行ったり、波乗りや友達の家のパーティーに行ったり、遊ぶ時は思いきり遊んでいました。

帰国した時は4年次生の前期だったので、目指していた航空会社の試験を受ける予定でしたが、思いもかけずリーマンショックが起こり、その影響で就職試験さえ実施されない状況になりました。このような状態でどうしようかと思っていた時、卒業間近になって大阪で街のサッカークラブを作るという話を聞き、その立ち上げに協力させていただくことになりました。半年強の短い期間ではありましたが、この経験を通してクラブの経営や運営の楽しさを学びました。

その後、実家のある栃木県に帰りました。当時貯蓄が底をついていたので、すぐに就ける仕事を探しました。ちょうど、好きだったスターバックスが求人を出していたので、すぐに入社しました。そこではコーヒーを通じて、本当にたくさんの方々に出会いました。その出会いの中で接客、人材育成、店舗運営など様々な事を学ぶことができ、たくさ



I-Chat Loungeでの楽しかった日々
(上:本人後列右から2人目、下:右端)

目次

Hello from All Corners of the World!	1-2
ボランティア活動を通して世界を見よう!	2-3
大阪学院大学 教育改革フォーラム	4
私のおススメ in Prague~ Uyuki Tanaka	4



んの方々に囲まれて本当に楽しい時間を過ごすことができました。

スターバックスで4年目を迎えた頃、どうしてもサッカーに関わることがあきらめきれず、去年の3月に退職を決めました。サッカーに関わるように、ハローワークで土日が休みの仕事を探し始めました。その時薦められたのが、現職である自動車部品の開発設計でした。今の世の中で部品のことが全く分からない文系の私を育ててくださる温かい会社があったことが驚きでした。元々車好きだった私はすぐに入社を決め、去年の9月から働き始めました。サッカーの為に転職したにも関わらず、今の仕事がとても楽しく、サッカーはとりえず保留にして、部品の開発設計に没頭する日々を過ごしています。

この仕事に夢中になっていたらちょうど今年2月頃、1ヶ月ほどアメリカに出張する機会を得ました。留学経験を買われての抜擢でした。久しぶりの渡米は不安もありましたが、それよりも今まで私に関わってくださったすべての方々に対する感謝の念がとても大きくなりました。アメリカでの仕事は、大学や留学生活、スターバックスや現職での経験などが活かされ、すべてが順調に進みました。また現地ではたくさんの大切な出会いもありました。

現在は帰国し、栃木県で相変わらず部品の開発設計に関わっています。今後の予定です

が、あまりにもアメリカでの仕事が好き興味深かったので、いつかアメリカで自分の知識や経験が活かせる場を探せればと思っています。そのために日本でも設計士として色々な仕事に関わって、経験を積んでいきたいです。

ここまで読んでいただきありがとうございます。私が在学生にお伝えしたいことは2つです。1つは「もし今、夢や憧れがあるのなら、自分の気持ちに素直になって行動してみる」、もう1つは「自分の心と対話して、本当にやるべきだと思うなら思い切ってやってみる」。これが私が皆さんに伝えたかったことであり、私の人生のモットーです。私の拙い文章が少しでも皆さんのお役に立ったなら嬉しいです。

2. ボランティア活動を通して世界を見よう！

最近では海外でのボランティア活動への注目が少しずつ高まっています。OGUでも毎年春期休暇に約2週間のタイボランティア研修を実施し、提携大学であるコンケン大学のボランティアプログラムに参加させていただいています。今回は春休みを利用してカンボジアの孤児院でのボランティアを経験した塚本莉衣奈さんの体験を紹介します。子供たちに触れることによって、本当の豊かさを感じることができた体験談です。
※塚本さんはこのボランティアの直後に韓国のペソク大学に行き、交換留学生として1学期間、韓国語と文化を学びました。

TeaSta: “カンボジアで出会ったとびっきりの笑顔”

塚本 莉衣奈（経営学部ホスピタリティ経営学科4年次生）



孤児院の子供たちと(本人2列目右端)

私 は今年の2月13日から19日という短い期間でしたが、TeaSta(ティスタ)という団体を通して、同じ学科の友人と2人でカンボジアの孤児院ボランティアツアーに参加しました。

滞在中は、孤児院を運営していて、日本語が話せるカンボジア人のソントンさんという方の家にホームステイさせていただきました。そこはカンボジアでも裕福な家庭で、各部屋にシャワーとトイレがついているホテルのようなお宅でした。ハエや蚊がたくさんいるものの、快適に過ごすことができます、とても温かい家庭でした。

私たちはこの5日間、毎日午前中は孤児院に行き子供たちと遊び、日本語を教え、一緒に

昼食を食べ、午後はスパ、世界遺産のアンコールワット、ナイトマーケット、アキ・ラー地雷博物館などに行き、毎日盛りだくさんのスケジュールを立てて行動しました。

TeaStaのボランティアは、何軒も孤児院を訪問するのではなく、一つの孤児院でボランティアに取り組み、何を子供たちに教えるかは自分たちで考えることができます。そこで、私たちは子供たちに日本語で自己紹介できるようにしてもらい、将来の夢を紙に書いてもらうことをメインの取り組みにし、残りの時間はみんなで一緒にできる大縄跳びやダンスを教えることにしました。

この子供たちは様々な背景を持ち、幼いころから孤児院で暮らしています。だから参加する前は、日本の子供たちの方が幸せだろうと思っていました。しかし、想像に反して孤児院の子供たちは、とびっきりの笑顔で無邪気に遊び、一生懸命勉強をし、英語ができて当たり前前の生活を送っています。そして、皆しっかりした将来の夢を持っています。もちろん子供なのでいたずらも大好きで、私たちは毎日彼らを追い掛け回していました。

その他にも、私たちが滞在中にソントンさんの遠い親戚の結婚式があり、ホスピタリティ

経営学を専攻している私たちは、思いもかけずその式に参加させていただけることになりました。結婚式では、日本とは違うことが次から次へ起こり、驚くことがたくさんありました。特にゴミをテーブルの下に捨てる習慣と、従業員のフォーマルとは言えない態度に衝撃を受けました。しかし、これは貴重な経験になりました。

カンボジアでの5日間は本当にあっという間に過ぎ、一緒になって遊んだ子供たちと別れ



アンコールワットで(本人左端)



る時は涙が止まりませんでした。それと同時に、この子供たちはボランティアで来る外国人と、こんな別ればかりを経験しているのかと思うと、それも辛かったです。私たちとの出会いが彼らにとってこの先日本語を学ぶきっかけとな

り、夢に向かって頑張る元気に繋がれば嬉しいです。また、私も貴重な経験ができたので、このボランティアツアーに参加して良かったと心から思いました。

※この記事で取り上げられているTeaStalは「外国の貧しい子どもたちに教育の機会を与える(教える)ことで、参加者の方の学び(語学力向上、海外での貴重な経験)につなげる」(HPより抜粋)ことを目的とした団体です。詳細はHPで。 <http://teasta.jp/>

交換留学に参加する学生に少しでも世界の状況に目を向けて欲しいとの思いからスタートしたOGU×フィリピン。卒業生の大川 耀君が紹介してくれたRubyさんと話をすることで、私たちに何かできることはないだろうか、どうしたら子供たちに喜んでもらえるだろうかと考えました。なかなか軌道に乗らなかった活動ですが、この春のInternational Fairをきっかけに有志の学生たちが活動を引き継ぎ、8月には初めてフィリピンの子供たちに物資を送ることになりました。今回寄稿してくれたのは、その中心となって活動している学生の一人、村山日向乃さんです。活動は随時Facebookページにも紹介していますので、そちらもチェックしてみてください。

OGU×フィリピン: “微力でも無力じゃない!!”

村山 日向乃 (国際学部3年次生)



フィリピンの子供たちと(本人後方中央)

まず始めに、皆さん、フィリピンという国をご存じですか？日本の約8割の大きさで、7,109の島々から成り立っている国です。人口は約1億100万人で、首都はマニラ、日本との時差はたったの1時間です。公用語はタガログ語と英語なので、どこに行っても比較的英語が通じる国です。私は1年次生の春休みを利用してそんなフィリピンで1ヶ月間の語学留学をしました。語学向上を目的としていたので、あえてスパルタ式の学校を選び、平日は午前8時から夜の10時まで英語漬けの生活を送りました。その中で大学の先輩の知り合いで平日は公立小学校の先生、週末はスラム街で子供たちの支援活動をしている女性、Rubilyn Cabardo Pastrano(Ruby)さんを紹介してもらい、彼女に現地の教会とスラム街へ連れて行ってもらいました。そこで食べ物や飲み物の配給を手伝い、彼女が子供たちのために開催している英語のクラスを見学させてもらいました。今まではテレビを通じて何となく存在を知っていたスラムという地域で、決してきれいとは言えない服と靴を身にまといながら、楽しそうに英語を学ぶ子供たちの姿はとても印

象的でした。そこで出会った子供たちに「親の収入が安定してなくて、食べるものが十分にならないから学校へいけない」、「安心して寝られる場所がない」と言われました。もし皆さんがそう言われたら、どう感じますか？私は人生で初めて言葉にできない感情が沸き上がってくるのを感じました。さらに、その日帰る時に子供たちは、私に手を振りながら「ARIGATO」と言ってくれました。私も普段よく使う「ありがとう」という言葉。いまさらですが「ありがとう」は感謝を伝えるときの言葉ですよ。私はその日まで「ありがとう」はいつ言われても嬉しい言葉だと思っていました。ですがその日の帰り際の「ARIGATO」には戸惑いました。それは子供たちにありがとうと感謝してもらえるようなことが何一つできなかったと分かっていたからです。だからこそ帰国後、縁あって出会った子供たちと今後も何かしらの形で関わっていきたくらい「OGU×フィリピン」に参加することを決めました。

現在、「OGU×フィリピン」はOGU学生5人で構成されています。4月に行われたInternational Fairをきっかけに物品寄付の呼び掛け、寄付BOXの設置、定期的なニュースレターの発行を行っています。8月には集まった物品をRubyさんに送り、スラム街の子供たちに届けてもらう予定です。

何事も1人の力ではちっぽけかもしれませんが、微力でも無力じゃないと私は信じ、これからも「OGU×フィリピン」を通して子供たちに関わっていきます。そして、この活動がこの時だけのものに終わることなく、微力でも小さな世界貢献を継続していきたくらいと思います。その中から自分の生き方を見つめ、自分が世界に貢献できる形を見つけていきたいです。



OGU×フィリピンのFacebookページ



(上) Rubyさんと(本人右)

(下) 笑顔で見送ってくれた子供たち

皆さんも家でずっと使っていない、もう使わなくなった文房具や子供たちが使える物品があれば、国際センターのラウンジに寄付BOXを設置していますので、寄付のご協力をお願いします。

※ 大変遅くなりましたが、多くの方に寄付していただいた文房具は10月初旬にRubyさんが勤務されているフィリピンの小学校宛に発送させていただきました。この場をお借りして、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。





3. 「大阪学院大学教育改革フォーラム 公開シンポジウム: 世界で生きるチカラ」



パネルディスカッションの様子

7ヶ月の準備期間を経て2016年7月9日に「大阪学院大学 教育改革フォーラム 第1回公開シンポジウム」を開催しました。すべての始まりは坪谷ニューエル郁子氏の著書「世界で生きるチカラ」との出会いでした。一つの出会いが引き起こした化学反応がこのシンポジウムと言えます。



上: 坪谷ニューエル郁子氏と著書「世界で生きるチカラ」
下: 鈴木信之氏



文部科学省が2018年までに200校まで増やすと打ち出したことで大きな注目が集まっている国際的な教育プログラム「国際バカロレア (IB: International Baccalaureate)」。その背景にあるのは、急速に進む国際化に対応できるようなグローバル人材の育成の必要性が認知されてきているからではないでしょうか。ではどのような取り組みがグローバル人材の育成に必要なのか。そのような視点に立つてこのシンポジウムを開催しました。

今回は、国際バカロレア機構アジア太平洋地区委員であり、東京インターナショナルスクール理事長の坪谷ニューエル郁子氏、文部科学省で国際バカロレアの推進に取り組まれている大臣官房国際課国際協力企画室室長の松木秀彰氏、企業という立場から学生や社会人のグローバル人材育成に尽力されている株式会社エストレリータ代表取締役社長の鈴木信之氏をお迎えし、さらには国連工業開発機関 (UNIDO) 本部での勤務経験など海外経験豊かな本学経営学部の中野有教授も参加し、様々な立場から若者が「世界で生きるチカラ」を身につけるために何ができるかをお話いただきました。

当日は300名収容の教室がほぼ満席になるほどの盛況でした。学内のみならず、学外からも教育関係者の方々に多数ご参加いただき、これからの教育を共に考える機会になったことを本当に嬉しく思います。

ここではシンポジウムの全てをご紹介しますことはできませんが、私が一番心に



上: 松木秀彰氏
下: 本学経営学部 中野有教授



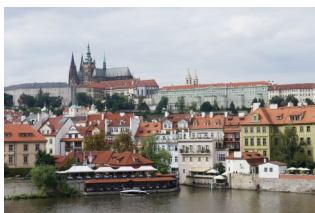
残っている言葉を共有させていただきま。それは坪谷先生のグローバル人材の定義です。「自分が属する社会の中で、自分が好きなこと、得意なこと、できることを活かして、その社会をより良く、平和にしていこうと貢献できる人」。グローバル人材と言えば世界に羽ばたいて活躍する人だと思われがちですが、もはや今私たちの生きている場所がグローバル社会の一部だと考えれば、そこでどう自分が貢献できるかを考えて行動することが大切なのだといふことがされました。またそれが自分自身をグローバル人材にしていこうとすることはできないかと思いました。

これを機に教育現場から様々な取り組みについて情報を発信していく教育改革フォーラムを継続して開催していきたいと考えています。次回も多くの方々のご参加をお待ちしております。(M)



私のおススメ in Prague ~ Uyuki Tanaka

私のチェコ・プラハでのオススメはとにかく街を歩き周ることです。長い歴史を持つプラハはあちこちにお城や古い美術館などがあり、街を歩いているとその全てを感じることができます。定番の観光地ですが、プラハ城は必見です。プラハ城は世界で最も古く、最も大きなお城で、様々な建築様式が使われているため、他の国では見られないような素晴らしいお城です。またプラハ城は丘の上にあるため、そこからプラハの街を見下ろすことができます。オレンジの屋根で作られた小さな家々は絵ハガキのようでとても可愛いです。プラハは小さなエリアにたくさんの観光スポットが集まっているので、徒歩での移動も何の問題ありません。とてもロマンチックで美しく素敵な街プラハは、歩いているだけでも自分がおとぎ話の国にいるような気分になり、ワクワクします。プラハを訪れることがあれば、ぜひあなたの足で街を感じてみてください。(外国学部2年次生、プラハメトロポリタン大学留学中)



★ホストファミリーとホームビジットファミリーを随時募集しています。

興味をお持ちのファミリーは、詳細情報をお送りしますので、inoffice@ogu.ac.jpまでご連絡ください。

大阪学院大学／大阪学院大学短期大学部 国際センター

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

TEL: 06-6381-8434 (代表)

FAX: 06-6381-8499

Email: inoffice@ogu.ac.jp

国際センターBLOG "Taking Off" もご覧ください。
<http://inoffice.blog102.fc2.com/>

